ペチュニア、預かる

柚乃

わたしは、お喋りが苦手だから、三階から見下ろしていた。花壇の周りに人がいっぱい、集まっている。大人が、いっぱい。

土いじりが好きな、障害者もいる。お友達がいっぱいいる、障害者もいる。わたしは、この部屋で、時間を追うごとに、それを知った。

窓を開けていて、風が気持ちいい午後だった。

「みんなで、お花の種をまいているんだよ。」

職員さんはやってきた。

「声がしたから、覗いた。」

「ふうかさんもやらない？」

わたしは、黙った。

「好きな花はある？」

思いついた花は、ペチュニアだった。なので、そう答えた。昔の話だった。

「よく、知ってるね。詳しいんだね。」

驚いていたようだけれど、記憶の欠片に過ぎない。

「お花、好きなんだね。」

「普通です。」
「ペチュニアの種もあるよ。」
わたしは、再び黙った。執着していると、思われたくなかった。
「残しておくから、気が向いたら。」
「はい。」
ペチュニアなんて小難しい響きを、この歳になっても憶えていることは、自分でも発見だった。今の今まで、忘れていたことさえ忘れていた。
「しばらくやっているから、また、誘うね。」
「はい。」
堰を切ったように、記憶はどんどん、蘇る。
背中を向けられても、切なさは込み上げない。見送る余裕すらあったような、気がする。言葉通り、また、ここへきてくれるはず。約束は守ってくれる。そう、時間を空けずに。

わたしは、本来に戻った部屋で、思い返していた。
小学生の時、初めては、二年生の時だったと思う。花を咲かそうという、試みがあった。わたしはスコップを上手く、持てない。使えない。土を触れない。

クラスのお友達、と呼ぶらしい子たちと仲良く楽しく取り組めなかった。
わたしがいつまでも戸惑っているので、見かねた先生は、言った。
「ふうかさんは、そこで見ていて。」
それでも、自分も何かをしなければならないと思い、慌てていると、
「いいんだよ。無理をしないで。そこに座っていたらいいから。」
こちらを見て、優しく微笑む。その笑顔もすぐ、頼りないものとなる。
「先生、この後はどうするの？」
の、子どもの声に、
「どこまでやった？」
すぐに背中を向けた、説明を始めたからだ。わたしには理解できない、単語が続いた。黒い頭が、ずらり集まった後ろ姿は圧巻で、背も伸びたのだろう、背中が凛々しいものだった。
順調に発育している。この四十人近くの、どの人の、心模様も想像できなかった。
「手が汚れる―。」
「ぎゃー。この汚いの、とれないよ。」
「軍手をすればいいでしょう。口より先に、手を動かしましょう。」
「軍手ないもん。持ってきてない。」

「上級生のがあるから、ロッカー上の段ボールから取ってきていいよ。」
わたしは自分のてのひらを見つめる。綺麗だった。しかも、いくらか香りが残っている。ついさっきの休み時間、みかん石鹸で洗ったのだ。まだまだ、小さな手だと思った。しかし、それはみんなも同じこと。
大きくなったら、追いつけるはず。そう、願うほかない。
今はわたしは言われた通り、その場でじっとして過ごす。膝を抱えて、床の木目をなぞった。
クラスメイトの笑い声も、突如始まった喧嘩も、遠い国の出来事だった。一日中、そうして座っているようで、未来を暗示しているかのように感じていた。
正直、何もしなくていいと声をかけられた時、安心する自分がいた。けれど次の瞬間には、寂しさが襲う。こんなにみんな楽しそうなのに、みんな簡単にやっていることなのに。ちっとも理解できないわたし。質問もできないわたし。
せっかく履き替えた靴もそのまま、母の知るところではないだろう。
教室でも校庭でも、自分の居場所はないと思った。休み時間も、自由時間も、結局こうして終わっていく。けれど、あの時の自分には、どうしようもなかった。学校を休みたいとか、支援学級で学びたいとか、自分の気持ちを伝えられないまま、わたしは三十を超えた。

あのあと、ペチュニアは咲いた。わたしは置いてけぼりのまま、何君、何ちゃんの手によって。

けれど、今は違うのかもしれない。時代は流れるものかもしれない。実際、あれから何度も、季節は巡っている。誰かに見つけられる時を、わたしはずっと、いつまでも待っていたのかもしれない。ただ、もう、待ちぼうけを食らっている場合じゃない。花も、種をまかなければ、始まらない。可能性の芽を摘まないために、自分のために、何ができるのか。花に水をやることさえ続かなかったわたしでも、きっと、やり直せる。

夏、わたしは一歳、年を取る。

振り返れば、お友達が賑やかな季節は、花が美しい頃は、いつも夏だった。

夏は賑やかな時間だから、やっぱり、ペチュニアの種を預けて欲しいと、伝えよう。

必ず綺麗に咲いてみせるから、見届けて欲しいと願った。

ペチュニア、預(あず)かる

2023 年 10 月 28 日　発行

著者　柚(ゆ)乃(の)

町制施行 60 周年・かんなみ知恵の和館 10 周年記念事業冊子
発行　函南町教育委員会
製本　函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。
（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の
第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。
作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるもの
とします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は
著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

皆が花の種を植える様子を三階から眺めていたわたし。

好きな花をたずねられてふと思い浮かんだ花がペチュニアだった――過去の記憶とこれからの希望の物語。